第一回張栻學術討論會・明代學術思想討論會

永冨青地

筆者は八九年九月より九二年八月にかけて、國費留學生として北京大學哲學系に留學した。その間、關係者の御好意により、いくつかの學會に參加することができた。今回は其の内日本からの參加者が少なく、筆者の專門に比較的近い二つの學會についての報告を行ないたい。

一、第一回張栻學術討論會

本討論會は、四川省社會科學院、四川大學、四川省社會科學界連合會、湖南大學岳麓書院などの主催により、九一年十一月五日より八日にかけて四川省綿竹縣で行なわれた。綿竹の名は、一般には諸葛亮の子瞻と孫尚が戰死した所として知られているが、張栻の生誕の地でもある。今回、張栻學術討論會が行なわれることになったのもその關係からであり、主催團體の中に岳麓書院が加わっているのは、張栻の主な活動が湖南衡山に於てなされていることによるのだろう。

參加者は合計百十一人（大會名簿による）で、其の内香港から一人、日本からは人民大學に留學中の難波征男教授（福岡女學院短期大學）及び筆者の二人が大陸以外からの參加であった。

綿竹縣は省都・成都の北方約八十キロ、車で二時間ほどの所に位置する。討論會は縣の人民政府の施設を利用して行なわれた。

討論會の主なスケジュールは次の通り。

十一月五日

（午前）
開幕式
読書臺見學
（午後）
大會報告
黄宣民（中國社會科學院歴史研究所）
對張栻學術的粗淺認識
陳谷嘉（湖南大學岳麓書院）
張栻及湖湘學派研究
胡昭曦（四川大學圖書館）
朱熹與譙定張栻的學術連係
王煜（香港中文大學哲學系）
胡宏、張栻、魏了翁對佛教的批判

十一月六日
（午前・午後）
小組（グループ）討論

十一月七日
（午前）
祥符寺見學
（午後）
南軒祠、紫岩書院、張咸墓見學

十一月八日
（午前）
大會報告
盧鍾鋒（中國社會科學院歴史研究所）
張栻與南宋理學
總括
永冨青地（早稲田大學大學院）
蔡方鹿（四川社會科學院哲學研究所）
謝辭
張元生（張栻二十五代の子孫）
閉幕式

大會での發表者のうち、陳谷嘉氏と蔡方鹿氏はそれぞれ、『張栻與湖湘學派研究』（湖南教育出版社、一九九一）と『一代學者宗師――張栻及其哲學』（巴蜀書社、一九九一）という張栻に關する專著がある。又、黄宣民氏と盧鍾鋒氏は、『宋明理學史』（人民出版社、一九八四～八七）の共同執筆者である。

六日のグループ討論は、大會で發表できなかった人の發表の場、といった趣きがあり、日本側の參加者もここで報告を

行った。參加者全員が論文を準備する中國式の學會では、グループ討論がこのようになるのも、致し方のないことかもしれない。

見學のうち、張栻に關係する場所について若干觸れておきたい。

五日に見學した読書臺は、人民政府から歩いて數分の所にあり、現在は公園になっている。張栻が幼年時代読書した所といわれ、そのことを記した碑が最近建てられたが、當時の遺跡は特に殘ってはいないようである。

七日に見學した南軒祠は、現在の南軒中學（今回の討論會を記念して改名）の構内にある。本來は敬夫室といわれ、彼の父浚を記念して建てられた進德堂の付近にあったものである。現在の建物は、清代のものという。

紫岩書院は、もともとは読書臺の位置にあったが、明代に移動した。現在は綿竹中學の構内にある。現存する遺跡は月波井、止止亭、回瀾塔、湖橋であり、全て清代のものである。

張咸墓は、正しくは「宋雍國公張咸及秦國夫人計氏墓」といい、漢旺鎮柏林村にある。地名の通りに柏の林の中にあり、廣大な敷地をもつ。張咸は栻の祖父にあたるが、福建の朱熹の墓と比べると、さすがに家格の違いを反映して、はるかに大きなものである。但し、文革中に徹底的に破壞され、現存しているのは光緒年間に重立された宋大觀年間の「宋賢良張公碑」と石馬石羊各二個のみである。

今回の討論會は、地元の研究者が以前から準備していた論文の中に、興味深いものがあった。特に、四川大學の侯安國氏の「張南軒先生文集三考」は、『南軒文集』の版本研究として出色のものであった（なお、この問題に關する研究として、日本では高畑常修氏の「張南軒集の版本」（中京大學文學部紀要八―二、後『張南軒集人名索引』采華書林一九七六所收）がある）。

氏は現在の『南軒文集』の佚文百編餘を指摘し、そのような多數の佚文が生じた理由を次のように述べている。

一、朱熹が編集の際に、張栻の若年の作を佚した。

二、朱熹が編集の際に、奏議及び論事の書尺を佚した。

三、朱熹は張栻の一部の文章に對して意見があり、編集の際に收めなかった。

四、一部の文章は、當時轉々と筆寫されて別人の手に渡り、朱熹は編集の際に見ることができなかった。

五、一部の碑刻は、當時交通が不便だったので、朱熹は編

集の際に見ることができなかった。

聞く所によると、氏の研究成果を取り入れた『張栻全集』の企畫もあるそうで、實現が期待される。

今回の討論會における發表のうち、主なものは雜誌『天府新論』(四川省社會科學界連合會)の九二年第二期に掲載されている。なお同號は「首屆張栻學術討論會專輯」として全ページを本討論會の特集にあてているが、侯安國氏の論文が長篇のためか掲載されていないのは殘念である。

尙、第二回張栻學術討論會は、湖南大學岳麓書院の主催で行なわれることが既に決定している。

二、明代學術思想討論會

本討論會は正式には「祝賀容肇祖教授九十五壽辰暨明代學術思想討論會」と言い、九二年五月十二日から十五日にかけて、中國社會科學院哲學研究所の主催により、北京の社會科學院の施設を使用して行なわれた。なお、本討論會については既に『哲學研究』(哲學研究雜誌社)の九二年第六號に於て報告がなされているので、できる限りそれと重複しないようにしたい。

容肇祖氏は廣東省東莞縣の人。一八九七年十二月一日生。北京大學に學び、顧頡剛の研究法の影響を受ける。厦門大學、中山大學、北京大學などで教鞭を執り、一九五六年六月に中國社會科學院に哲學研究所が設立されるとともに、研究員に任命されている。

容氏の研究は、氏自身が哲學、歷史及び文學、民俗學の三部門に分類している(「我的自傳」、『中國當代社會科學家』第八輯、書目文獻出版社一九八六所收)ことからも判るように、極めて廣い範圍にわたっているが、その本領が明代思想史研究にあることは衆目の一致する所である。特に一九三六年の『李卓吾評傳』(商務印書館)と四一年の『明代思想史』(開明書店)は、今なおこの分野を研究するものの必読書である。また、日本に於ても『明代思想史』の飜譯があり(松川健二等譯、北海道中國哲學會一九六五)、大學院のテキストに使用されたりしていた。

しかしながら、四九年以後、容氏の學問は必ずしも高い評價を受けていたとは言えない。『何心隱集』(中華書局一九六〇)、『王安石老子注輯本』(同一九七九)、『吳延翰集』(同一九八四)などの標點とごくわずかの論文を除くと、戰前の『李卓吾評傳』の年譜の部分の燒き直しである『李贄年譜』(三聯書店一九五七)ぐらいしか出版されていないのである。

このような傾向に變化が見られたのはごく最近のことであり、八九年に氏の戰前の業績を中心にまとめられた『容肇祖集』が齊魯書社から出版され、九二年になって實に五十一年ぶりに『明代思想史』がやはり齊魯書社から再版されている。この『明代思想史』の再版は本討論會を記念して行なわれたものなので、後で若干觸れてみたい（なお、『李卓吾評傳』は『民國叢書』（上海書店）に收錄されている）。

本討論會の開幕式は五月十二日に北京の社會科學院で百人以上の出席者を集めて行なわれた。容肇祖氏も出席され、まだまだ御元氣そうで、御夫人をつれておられた。開幕式に於て祝辭を述べられたのは、張岱年（北京大學教授、清華大學思想文化研究所所長）、石峻（中國人民大學教授）、陳來（北京大學教授）等錚錚たるメンバーであったが、その內容はほぼ共通していた。第一に、文革中の迫害にめげず研究を續けた氏を賞贊することである。事實、容氏自身によると、「私は三度家搜し（抄家）に遇い、私の著作と論文、特にまだ印刷していなかった原稿（『李贄傳、付李贄著作考』と『清代思想史』など）は、大部分が失なわれた。」（『容肇祖集』前言）という有樣だったようである（なお、その際わずかに氏の手元に殘った原稿が『哲學研究』九二年第五期に「論嚴復」として掲載されている）。

第二に、容氏の研究の國外への影響力の强さへの賞贊である。このことについては、ほとんど全員が島田虔次氏への影響を述べていた。

又、陳來氏は、『明代思想史』の自序で容氏が述べている、「黃（宗羲）氏が據っている諸書は盡く得ようとし」、さらには黃氏の未見であったり注意を拂わなかったりした本にも及んだ資料收集の努力を今こそ高く評價すべきである、と力說していた。

開幕式の後、午後からマイクロバスで郊外のホテルに移動して、討論會が行なわれた。討論會への參加者は七十人程であったが、論文を準備した人數は非常に少なく、座談會といった趣きがあった。

ホテルに移動後すぐに、參加者全員に再版された『明代思想史』がくばられた。若手研究者の中には、この本を初めて見た人も多かったようである。筆者の印象では、ここ數年の容肇祖再評價は、若手研究者にとっては新發見に等しいものだったように思える。

今回、中心になって討論を進めたのは陳來氏であった。氏の著作『有無之境』（人民出版社一九九一）は、楊國榮氏（華東

師範大學講師）の『王學通論』（上海三聯書店一九九〇）と共に、近年最も注目された明代思想史に關する研究成果である。楊氏の著作が「從王陽明到熊十力」という副題の通り、陽明學の變遷を新儒家に到るまで述べた通史であるのに對し、陳氏の著作は、書名からも判るように王國維の概念を利用して陽明學の性格を考察する哲學的議論と、年譜・著作などに關する手堅い考證とから成る王守仁個人についての專著である。これら二作は、それぞれ性格が違うものの、共に大陸の明代思想史研究が本格化したことを示すものである。

陳來氏は祝辭との關連で資料收集の問題について語った。つまり、容氏の『明代思想史』は四十年代の水準に於ては最大限に資料收集の努力を行ったものであるが、今日の目からすればなお不十分であり、より一層の努力が必要であるとするのである。又、陳來氏はそのような努力の例として、『學人』第一輯（江蘇文藝出版社一九九一）掲載の「王陽明逸文論考」を擧げていた。同論文は京都大學に留學中の吳震氏によるもので、京都大學所藏の資料から王守仁の逸文を探ったものである（なお、同誌第二輯に補遺が掲載されている）。

本討論會に於ては容肇祖氏に關するエピソードも多く語られたが、臺灣に於ける盜印版（海賊版）の問題もその一つであった。現在、氏の著作のうち臺灣から出版されているものとしては、『明代思想史』（臺灣開明書店）と『明李卓吾先生贄年譜』（臺灣商務印書館新編中國名人年譜集成第十八編）があるが、前者は四一年版から容氏の自序と卷末に付載された「述復社」を削除したもの、後者は三六年版の『李卓吾評傳』の第一章をそのまま單行本化したもので、いずれも純然たる海賊版である。今回の討論會では、『明代思想史』について臺灣の出版社から若干の印稅が支拂われたという話が披露された。今や著者の同意のもとに臺灣に於て大陸の研究書が出版される時代であるが（馮友蘭氏の『中國哲學史新編』と朱伯崑氏の『易學哲學史』の最終卷は共に大陸より先に臺灣から出版されている）、過去の分についても精算がなされることは、やはり望ましいことであろう。

今回の討論會では、明代氣學に關する議論が目立っていた。明代氣學については、近年葛榮晉氏（中國人民大學教授）が大いに顯彰に努めておられるが（例えば『王廷相與明代氣學』中華書局一九九〇）、特に若手の研究者から明代氣學の意義についてかなり懷疑的な意見が出されていた。又、これらの討論を通して、『氣の思想』の全譯の出版（上海人民出版社一九九〇）が大陸の研究者に對しても一定の影響を與えている

ことが窺われた。

ともあれ、參加者の一人が述べていたように、大陸に於て明代思想史に關する討論會が開かれたのは今回が初めてであり、大きな意味をもっていると言えよう。今回の討論會が今後の明代思想史研究の起點となるよう祈りたい。

なお、本討論會參加者による論文集が九三年中に出版される豫定である。